

幼稚園期の絵にみる成長

林 健 造

一、シンボルを使う動物

人がサルその他の動物と異った特色をもっていることの中で、一つは「シンボル化作用」をもっていることが挙げられよう。

言語というものはまさにそういうものであるが、ここで述べようとする絵もまた、きわめて言語の体系とよく似ている、形象化されたシンボルである。

ハトは平和のシンボルであるが、ハトの絵はハトのもつ意味を表わしている点で一つのシンボルである。

ホールデン (Holdane, J. B. S.) は、「たんなる感情・情緒の表出や、すぐまじかの将来のできごとだけでなく、少し前、または遠い過去のできごとについても叙述することができる」という

ことで人の言語の特色を述べているが、人は同じく絵によってもそのことを述べることができる。

幼児期の絵かき行動は、言語や文字表現の未発達にともない、多分に言語の代用を果たしているという見方ができる。

従来、この幼児の絵かき行動を、「絵画」としてとらえようとする傾向が強く、したがって、絵画という概念のステレオタイプが、まず美を優先させ、構図法や色彩の調和などを尺度として幼児画をみていたことに墮^だしていたと思われる。

幼児の絵は、「ぼくのみた象さんって、耳がこんなに大きくてね」などということを描いて、ママとか先生とかに知らせようということなのであるから、一つの言語伝達とよく似た働きであり、ここでは、美よりもむしろ真の方が優先されなければならな

い。

ともあれ幼児はこのように色や形のシンボルを使って、自分を説明し、次第に自分を深めていく。

二、なぐりがきからの発展

深めていく過程に、いくつかの段階を通過する、これがいわゆる発達段階であるが、はっきりさせておきたいことは次の点である。

- 1、特定の年齢と結びついたものでない。
- 2、個体差があること。
- 3、進み方が、ある段階では早く、ある段階ではゆっくりしたり、一時あともどりをしたりすること。
- 4、ある段階をとびこしては進まないこと。

等で、いわゆる竹の節のように一直線に続くものではない。

幼児の絵かき行動は、およそ満一歳前後から始まる。いわゆるスクリブル（なぐりがき）という、たよりないたての線やよこの線がかかれ、やがて円形のものもこれに加わる。これは、人の手指関節の運動しやすい方向と大きなかわりを持つ。即ち、よこ線は左から右、たて線は上から下、小さな円は内旋円（時計の針と逆方向）、大円は外旋円となる傾向が多い。

このようななぐりがきは、一歳—二歳頃といわれているが、三歳でも、四歳でも情緒不安定な場合などしばしば表われる。前述のような一時的後もどり現象である。このなぐりがきを出発点として、いわゆる絵的なものに次第に発展していく過程について最もすぐれた研究を発表しているのは、サンフランシスコのゴルドン・ゲート保育学校のローダ・ケログ（Killogg, Rhoda）である。

ケログ（注1）は、絵画表現の基本的段階を次のとおり認めている。

一、なぐりがき

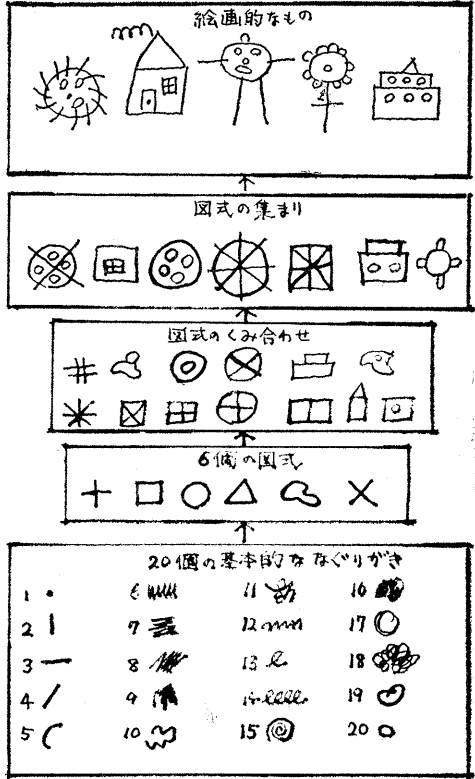
二、図式

三、図式の組み合わせ

四、図式の集まり

五、絵画的なもの

ケログはまずなぐりがきの基本型を20にまとめ、（点・垂直線・水平線・単一ループ線・不完全円等）、これらが蒸留と単純化の過程をへて次の六つの基本図式になる。（正十字形・正方形・円形・三角形・異常形・斜め十字形）。これらの図式が、はつきりと十字形や円が確立されるところを組み合わせで新しい形を創造する。かくして「図式の集まり」的段階になるわけである。



これはまだきわめて抽象的であるが、重要な意味をもつ段階である。というのは最も初期の画像の先駆になるからである。これを「絵画的なもの」という欄で示している。

世界中の子どもは、このような図式の集まりから、ゆっくりりとはあるが確実に絵画的なものへと成長する。(註1「美術の発生」デスモンド・モリス著 小野嘉明訳)

三、三歳児の絵の特色

写真①は三歳児が描いた「ママ」である。



写真①「ママ」三歳児

これが、まったく偶然ではあるが、前述のケロッグの「絵画的なもの」の人物とそっくりなのに驚く。このような人物表現は「頭足人」と呼ばれている典型的な型である。

自分のママを表現するのに、イメージは顔中心である。ママとは最も接触の多い、顔だけがイメージに強くなりつついていて、腹部や腕の関係位置の認識は漠としているからである。

ケロッグふうにいえば、円と直線の組み合わせで描いている。またお茶の水女子大学にも交換教授で来たことのあるゲシュタルト心理学者のアルムハイム教授は「幼

児はやがて 円の描き方を獲得すると、すべてのものを円を使って表現しようとする」ことを話してい

強いところを誇張してかく。(そのために、みえない部分をかくレントゲン描法などが生まれる)

c 未分化であるので、空想的な表現が多く、お話の絵などを喜んでかく。

d 人物も、頭、胴、手、脚などの関係が一応表現できる。

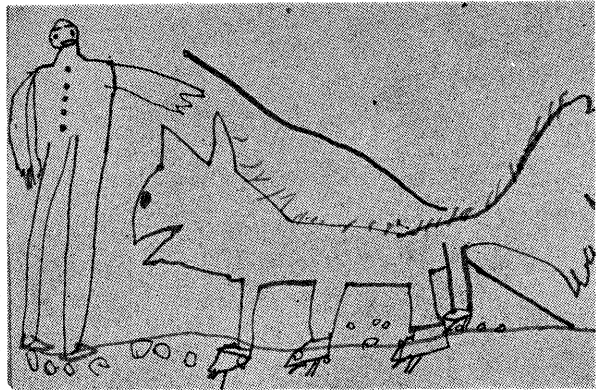
★レントゲン描法

特にレントゲン描法について註釈を加わえておくが、レントゲン描法というのは、ねている布団の中に人の体をかいたり、遠足のリュックサックの中にバナナを描いたりする絵の俗称で、本当は子どもがそう見えるのではなく、三次元の世界を二次元の画用紙に表現するときいかに表現すべきかを苦慮した上で、発見した方法なのである。バナナの絵とリュックサックの絵とを二枚描いて合わせたとみる方がわかりやすい。(これを製作やねんどで作らせると容易にレントゲン画の正体が解る)

五、五歳児の絵の特色

写真③は、「犬と遊んでいるぼく」という絵である。これは日本独特の描画材料割ばしとすみを使ってかいている。

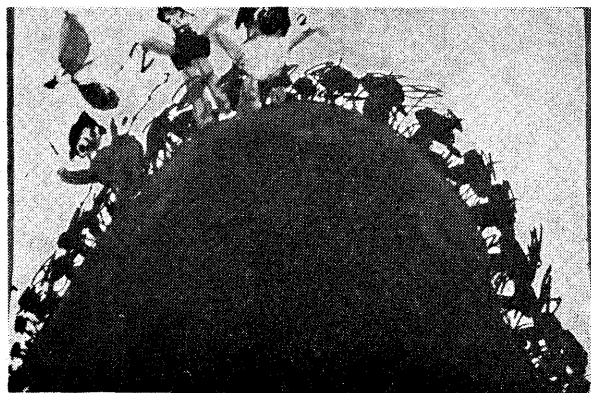
自分の家に大きな犬がいて、ぼくと仲よしなんだということをかいているのだろう。



写真③「犬とぼく」五歳児

の線の上に花・人・家などを横に並列してかくといった型が一番多い。アメリカのローウェンフェルド博士によれば、「これは社会性が育ったということである」という。単純にものをとらえていたことから、ものとの関係が解ってきたという成長のしるしといえよう。また同様に、画面の上には、線状に青色を塗り、隅に太陽を必ずかくといった型も、この基底線と並平行してでてくるが、これは高いところは空だということを表わしている。よ

ここで注目しなければならないなら、画面の下に一本の横線がひかれていることである。この線は地面を表わしている。いわゆる基底線と呼ばれるものである。五歳児の絵の大きな特徴は、この基底線が描かれるようになるといことである。しばしばこ



写真④「遠足」五歳児

く指導者が、「空は地面の上までであるのでしょう。だから青空を下まで、まんべんなく塗りなさい」等といっていることがあるが、それは子どもの絵のシンボル性と写実を混乱しているので誤りというべきである。

写真④をみてみよう。

これは遠足のときの絵であろうか、「お山にのぼったの。お山

には木がいっぱいあってね。小鳥さんもいたの」等という絵である。この場合山の曲線は一つの基底線になっている。したがって、人も木もその基底線に垂直にかかっている。このことは水平にかかれた基底線にもが垂直にかかっていることと同じである。

例の太陽が上の隅

にかかっているが、人のような目鼻のついた太陽で、アニメズムが残っている。これはほとんど世界中の子どもの絵に見られる現象である。

ここに絵はないが、画面の中に道路を表わす二本の線があり、その両側に人や家がひっきりかえったようにかけられる絵や、運動会の紅白球入れのようすをかくのに、丸い輪の外側に子どもたちが、みな寝ているようにかけられる絵など、いわゆる倒置表現（ひっくりかえった絵）は、実は初めに述べた基底線の原理の発展した型なのである。ローウェンフェルドはこれを「一本の針金にものを結びつけ、それを山形にすれば写真④のようになり、まるく輪にすれば展開図法のような絵になるのだ」と明快な解釈を与えてくれている。

一般的五歳児の絵の特徴は、

- a 大概の子どもが基底線をかき、その上に物を並べてかく。
- b 単独描写から生活を描く傾向が多くみられる。
- c ものともとの関係位置がととのってくるが、印象の強いものを誇張表現する。
- d 展開図法、レントゲン描法が多く見られる。
- e 空想的表現が多い。
- f 線の表現に加えて面的着色が増してくる。